

新型コロナウイルスのワクチンについて

日本でも新型コロナウイルスのワクチンの接種が始まりました。当院も小金井市の指定医療機関となりましたので、順次接種を行なっていく予定です。

よく患者様からコロナの予防接種による副作用が怖い！先生はどのように考えられますか？との質問をされますので、今回は新型コロナウイルスのワクチンを接種することのメリット（利点）とデメリット（欠点）について説明したいと思います。

ワクチン接種のメリット（利点）について

ワクチンには以下の3種類の効果があると言われています。

- ① 感染そのものを抑える感染予防効果
- ② 感染しても症状が出るのを抑える発症予防効果
- ③ 発症しても重症化を抑える重症予防効果

ワクチン接種の進んでいるイスラエルにて、現在日本でも採用されていますファイザー社の新型コロナワクチンを2回接種した市民60万人と接種していない市民60万人を比較したところ、②発症予防効果は94%、③重症化予防効果は92%でした。（①の感染予防効果を正確に調べることは難しいのですが、92%程度ありそうとのこと）ちなみに、例年皆様に受けていただいておりますインフルエンザワクチンの発症予防効果はおよそ40-60%と言われています。ファイザー社の新型コロナワクチンはとても効果が高い優秀なワクチンであることが統計として出てきているのです。

要約しますと、このワクチンを接種していただくことで新型コロナウイルスに感染する可能性を大幅に下げ、仮に感染をしたとしても症状の出現や重症化する可能性を大幅に下げることが出来ると見込まれているわけです。



ワクチン接種のデメリット（欠点）について

皆様が心配されているワクチン接種による副反応ですが、以下のようなものが認められると言われてしています。

ファイザー社の新型コロナワクチンの副反応

	1回目	2回目
注射部位疼痛	86.6%	79.3%
疲労	40.3%	60.3%
頭痛	32.8%	44.0%
筋肉痛	14.3%	16.4%
37.5℃以上の発熱	14.3%	32.8%

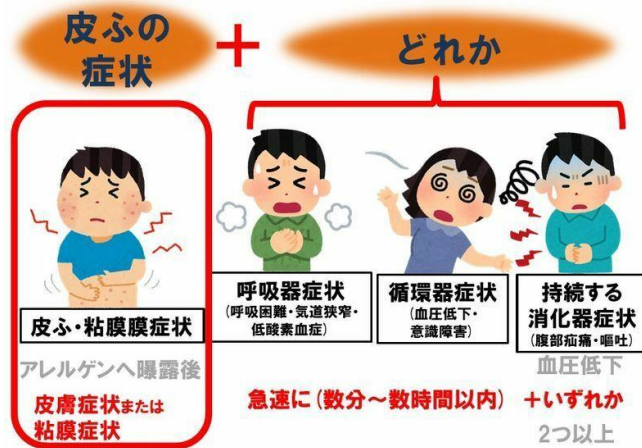
注射部位の疼痛はほとんどの人が発症し、それ以外に風邪をひいたような症状が出現する方が3～5割ほどいるということです。

私自身、既に2回接種を受けたのですが注射部位の疼痛は1回目2回目共にあり、2回目の接種から24時間後に発熱と倦怠感の症状が出現、半日ほどで改善を認めました。ワクチン接種を受けました職場の同僚の6割ほどが2回目の接種時には発熱や倦怠感の症状出現していたことから、我々日本人に対する副反応の頻度は上記とは少し異なるのかもしれませんが、いずれにせよ、出現した副反応は数日の経過観察で自然に改善するものがほとんどです。

次に、TV番組などで頻繁に取り上げられているアナフィラキシーの副反応についてです。アナフィラキシーとは、簡単に言うと強いアレルギー反応のことです。新型コロナウイルスによるアナフィラキシーの頻度は次ページ表のようなものとなっており、皆様が当たり前のように内服をされている抗生物質によるアナフィラキシーの頻度よりも圧倒的に低いことがわかります。そもそも、どんな薬においてもアナフィラキシー症状のリスクはあり、新型コロナウイルスのワクチンに対するアナフィラキシー反応は特別なものではないのです。

また、これまでのところ新型コロナウイルスのアナフィラキシー症状により死亡した方は世界で1人もいません。万が一アナフィラキシーが起きても薬で治療が出来ます。ワクチンによるアナフィラキシー症状を必要以上に恐れることはないと言えます。

アナフィラキシーの症状と頻度



ハチ	0.5%
抗生剤	0.02%
全身麻酔	0.005%
新型コロナワクチン	0.00028%
インフルエンザワクチン	0.00013%

最後に

新型コロナウイルスのワクチンを接種するかどうかは、法律で義務付けられているわけではありません。最終的には、個人の価値観による自己判断になります。私個人は、上記のメリットとデメリットを踏まえた上でメリットのほうが圧倒的に大きいと判断をして接種をしました。多くの医療関係者が同様の考えのもと予防接種を受けています。世の中を大きく変えてしまった新型コロナウイルスに対して、人類が初めて手に入れた有効な対抗策がこのワクチンなのです。

新型コロナウイルスワクチンを打つ

→注射部位の痛みや予防接種実施後の一過性の倦怠感や発熱などの症状が出現する可能性は高く、起きる可能性は非常に低いですがアナフィラキシー症状が起きるリスクを負うことになる

新型コロナウイルスのワクチンを打たない

→新型コロナウイルスへの感染の確率が高いままで、仮に感染した場合の重症化のリスクを負うことになる

予防接種を受けるかどうか迷われている方は、上記二つを比べどちらの判断が自分にとってより有益かどうかを考え、最終的な判断をしてください。

竹田内科クリニック医師 竹田溪輔